

SNBL News

SHIN NIPPON BIOMEDICAL LABORATORIES, LTD.
<https://www.snbl.co.jp/>



令和 **Vol.3** (2022)

Contents

- ・ごあいさつ
- ・セミナー報告
SNBLセミナー2021
- ・動物福祉への取り組み
全拠点でAAALAC Internationalの完全認証
- ・寄稿
高品質で迅速なデータの提供を目指して
新規モダリティ対応の促進
- ・投稿論文
細胞製剤の検出における
DUF1220配列測定系の可能性
- ・The 48th Annual Meeting of
The Japanese Society of Toxicology
参加報告
- ・サービスマニュー
サルを用いた中枢神経系薬効評価のご紹介
- ・SNBLの取り組み
コロナ禍でのGLP調査
- ・SDGs等の取り組み
サステナビリティレポートの作成



ごあいさつ



株式会社新日本科学
専務取締役
前臨床カンパニー プレジデント
角崎英志
Hideshi Tsusaki

明けましておめでとうございます。平素はひとかたならぬご厚情を賜り心よりお礼申し上げます。

新型コロナウイルスの世界的な感染拡大は変異株出現も相まってなかなか終息せず、お客様各位におかれましては、何かと不自由と心配が募っているものと拝察申し上げます。

そのような中、弊社前臨床事業の主な拠点である鹿児島と和歌山の研究所は新型コロナウイルス感染の影響を受けず、平時と同様に試験を実施しております。弊社グループは2021年3月期も前期比増収増益となり、2022年3月期上半期（2021年4～9月度）も好調に推移しました。これもひとえにお客様各位のお力添えによるものと深く感謝し、改めて御礼申し上げます。

近年、弊社では「ゼロミッション」と呼ぶプロジェクトを推進しております。今まで紙媒体で記録されたデータや証憑書類等を排除し、電子化するものです。これにより品質の向上はもちろんのこと、リードタイムの短縮等の時間的価値創造にも寄与しております。弊社では新型コロナウイルスのワクチンおよび治療薬の前臨床開発を多数受託して参りました。今回のパンデミックの教訓としてG7で合意されたいわゆる「100日ミッション」は、我々CRO業界にも変容を促しています。弊社は今まで以上に業務プロセスのカイゼン・イノベーションに主体的に取り組んで参ります。

2022年は弊社の創業65周年にあたります。今後も製薬業界の皆様へ貢献可能なCROとして役職員一同、鋭意精進いたしますので、引き続きご指導ご鞭撻のほどお願い申し上げます。最後になりましたが、本年が皆様にとりまして良い年となりますよう祈念いたします。



SNBLセミナー 2021

2021年1月22日に、Webinar形式にてSNBLセミナー 2021を開催いたしました。
今回のセミナーは「バイオ医薬品の非臨床試験-免疫毒性評価の基礎と実際-」をメイン
テーマに、以下の3名の先生方に御講演いただきました。

「バイオ医薬品の 免疫毒性評価概論」

北里大学獣医学部
中村和市 先生
Kazuichi Nakamura

「医薬品開発における 免疫毒学的評価研究」

千葉大学予防医学センター
上野光一 先生
Koichi Ueno

「バイオ医薬品の受託実績と 免疫毒性評価方法について」

株式会社新日本科学
安全性研究所 副所長
中村隆広
Takahiro Nakamura

弊社としては初めてのWebinar形式での開催でありましたが、延べ430名の方にご参加
いただきました。

また免疫毒性に関する基礎から、非臨床・臨床試験において必要とされる評価に関して
幅広くご講演頂き、活発なディスカッションが行われ、盛況のなか無事終了しました。
ご参加いただいた皆様に、厚く御礼申し上げます。

営業部

中村 剛 Takeshi Nakamura



全拠点でAAALAC Internationalの完全認証

株式会社新日本科学前臨床カンパニーは、AAALAC International (The Association
for Assessment and Accreditation of Laboratory Animal Care International/国際実
験動物ケア評価認証協会) より、2020年11月13日付で「FULL ACCREDITATION (完全
認証)」の評価報告書を受領しました。今回の調査では、従来から完全認証を継続してい
た安全性研究所及び指宿事業所に加えて、新たに薬物代謝分析センターが対象となりま
したが従前通り完全認証を取得しました。この認証により、株式会社新日本科学の動物飼
育施設は、海外拠点も含めて、全拠点でAAALAC Internationalの完全認証を取得した
こととなります。

AAALAC Internationalは、国際的な非営利組織で、科学の分野における動物の
管理・使用に関するプログラムを評価・認定しています。世界50 カ国で約1040以上
の企業、大学、病院、政府機関がAAALAC International の認証を受けています。
試験をご委託いただいている各社、団体様には、動物福祉に配慮した試験実施に
ご協力いただいておりますこと、厚くお礼申し上げます。

次回のAAALAC Internationalによる評価は2023年を予定しております。2025年
にはAAALAC Internationalが動物のプログラム評価に使用している参考資料の
一つであるGuide for the Care and Use of Laboratory Animals 8th Edition
(ILAR GUIDE) が完全に刷新される予定です。動物福祉の世界的トレンドを考えると、新
しいILAR GUIDEでは今までよりも高い水準の動物福祉が要求されると予想されます。こ
の改訂の動向は注視する必要があります。

今後もAAALAC Internationalの完全認証施設として、最新の情報を取り込み、動物管
理・実験プログラムの質の向上に努めてまいりますので、引
き続きご指導、ご鞭撻を賜りたく宜しくお願い申し上げます。

実験動物管理部

川島良介 Ryosuke Kawashima



高品質で迅速なデータの提供を目指して



安全性研究所 所長
運営管理者

平井照正

Terumasa Hirai

2020年から続く新型コロナウイルスへの対応が2021年も継続し、国内外を問わず大きな社会的影響が続いています。このような中、当社安全性研究所をお引き立ていただいております各社様には、こころより御礼申し上げます。また、コロナ禍の中、試験実施に際しての立ち合い制限など、皆様にご不自由をおかけしておりますが、ご理解・ご協力いただいておりますこと深く感謝申し上げます。安全性研究所ではワクチンの職域接種をはじめ感染防止策を徹底し、幸いなことに試験施設の運営、研究所職員に影響はなく、試験を進めることが出来ております。引き続き、試験の実施にご高配を賜りたく、宜しく願い申し上げます。このような環境下にあります。安全性研究所での他種多様の試験については、品質の高いデータ、迅速なデータの提供を日々目指しております。この取り組みとして、所内の業務プロセスの再構築、ロボット化やシステムの活用を進めており、新しい試験へも対応していく所存でございます。引き続き、ご指導・ご鞭撻を賜りたく、何卒よろしくお願い申し上げます。

新規モダリティ対応の促進



薬物代謝分析センター
センター長

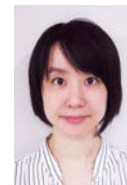
中村貴敏

Takatoshi Nkamura

新年を迎え、皆様におかれましてはますますご清栄のこととお慶び申し上げます。和歌山県海南市に立地する薬物代謝分析センターは、非臨床及び臨床試験における血漿等の生体試料中薬物濃度をChromatographyおよびLigand Binding Assay等の手法を用いて測定するバイオアナリシス試験の、非臨床試験におけるIn vivo及びIn vitro薬物動態試験の受託業務を実施させていただいております。近年、核酸医薬品、抗体医薬品、遺伝子細胞治療といった新規モダリティの開発が活発となっており、薬物代謝分析センターの主力受託業務であるバイオアナリシス業務の需要が、益々高まっております。薬物代謝分析センターでは、Chromatographyを用いたバイオアナリシス業務の促進のため、従来のトリプル四重極質量分析計に加えて、最新のTriple Quad 7500を複数台導入し、低分子医薬品の高感度分析や核酸医薬品をはじめとする新規モダリティへの対応を進めております。また、飛行時間型質量分析計についても、TripleTOF 6600 Plusを導入し、これら新規モダリティへの対応を進めております。従来の機器に加えて、これらの新規機器の導入により、皆様の医薬品開発に貢献できるような体制構築を進めておりますので、今後とも末永くお引き立てを賜りますよう、よろしくお願いいたします。

細胞製剤の検出における DUF1220配列測定系の可能性

特許登録済み



第二毒性評価室
大川友里恵
Yurie Okawa

再生医療等製品の安全性試験におけるヒト由来細胞製剤の検出には、一般的にAlu配列を標的としたQuantitative PCR (qPCR) 測定系が用いられます。Alu配列は霊長類の1細胞中に最も多く存在するMultiple copy geneであることから、Alu配列を標的としたqPCR測定系は検出感度が高い一方で、バックグラウンドが高くなることが問題点とされてきました。

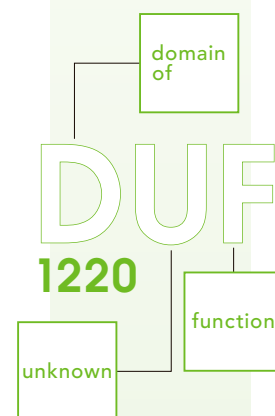
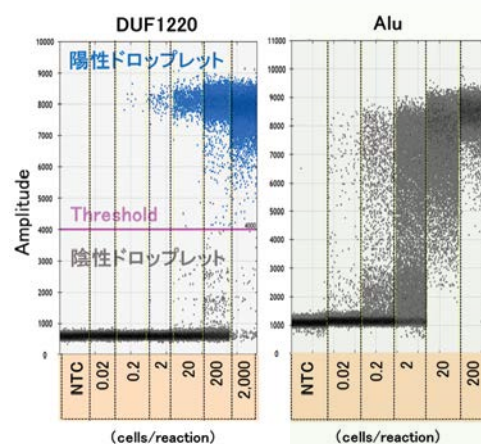
当社では、Alu配列とは異なるMultiple copy geneであるdomain of unknown function 1220 (DUF1220) を標的としたqPCR測定系を構築しており、本年Drug Metabolism and Pharmacokineticsに論文を投稿致しました。¹⁾ DUF1220を標的としたqPCR測定系は、Alu配列を標的とした測定法と比較してバックグラウンドが低く、Alu配列と同等の高い検出力を持つことや、ヒト以外の霊長類由来配列との識別が可能となることから有用であると考えています。

近年、qPCRと同等かそれ以上の検出感度、再現性を有し、マトリックスによるPCR阻害の影響を受けにくいとされているDroplet Digital PCR (ddPCR) への注目が高まっており、再生医療等製品の検出においてもddPCRの利用が期待されています。

ddPCRでは、検査試料を10000以上の均一な液滴(ドロップレット)として微小区間に細分化し、ドロップレットごとにPCR反応を実施して標的DNAを増幅させます。標的DNAが増幅し蛍光を発しているドロップレット(陽性ドロップレット)と、増幅されず蛍光を発しないドロップレット(陰性ドロップレット)をカウントすることで、絶対定量を行います。

当社では、細胞製剤の検出をddPCRに適用可能か検証するため、ヒト細胞由来DNAを用いて、Alu配列とDUF1220配列を標的としたddPCR測定系の比較を行いました。図に各測定系で得られたAmplitude plotを示しています。Amplitude plotでは、蛍光強度(縦軸)に応じて検出されたドロップレットがプロットされており、蛍光を発しているドロップレットと発していないドロップレットの間にThresholdを決定することで、陽性及び陰性ドロップレット数をカウントします。図に示すようにAlu配列を標的とした測定系では、陽性ドロップレットと陰性ドロップレットの識別が難しくThresholdが決定できなかったため定量値が得られなかった一方で、DUF1220配列を標的とした測定系では、陽性及び陰性ドロップレットを明確に識別することができ、定量可能であることが分かりました。複数のAlu配列測定系で同様の結果が得られていることから、ddPCRを用いた細胞製剤の検出では、DUF1220配列を標的とした測定系の方が適している可能性が示唆されました。

また、DUF1220配列を標的としたddPCR測定系を用いて、ヒト細胞を投与したマウスの生体内分布評価試料において標的遺伝子の検出が可能であることを確認しています。Alu配列を標的としたqPCR測定系による細胞製剤の評価については、すでに20試験以上の受託実績がございますが、今後は更にDUF1220配列を標的としたqPCR測定系やddPCR等の現在注目されている新しい技術を用いた試験についても対応し、様々なご要望に応じてまいりたいと考えています。



1) Okawa et al., Evaluation of domain of unknown function 1220 (DUF1220) for detection of human genome by quantitative polymerase chain reaction: Potential use in assessing the biodistribution of transplanted therapeutic human cells. Drug Metabolism and Pharmacokinetics. Volume 38, June 2021; 100366



兵庫県神戸市

SNBLブース

第48回日本毒性学会学術年会 参加報告

2021年7月7日から9日まで神戸国際会議場で開催されました第48回日本毒性学会各術年会にてブース展示と2演題のランチョンセミナーを行いました。

コロナ禍の中、多くの方にブースおよびランチョンセミナーへ参加いただきました。

誠にありがとうございました。

また、安全性研究所から水由健介、福田剛司、中西康晴の3名がポスター発表を行いました。



Luncheon Seminar



安全性研究所 副所長
中村隆広
Takahiro Nakamura

新規モダリティの医薬品開発における 免疫毒性評価と当社での受託動向

近年、新規モダリティの医薬品開発が盛んになっており、これらには免疫系に影響を及ぼすものも存在します。免疫毒性評価にはT細胞依存性抗体産生や細胞性免疫能が利用されていますが、最近ではサイトカインの網羅的分析、イムノフェノタイピングでは多項目分析、各種抗原に対する免疫組織化学的検査などを整備しており、より詳細な評価が可能となっています。これらについての当社の実績と状況を報告しました。また、新規モダリティの医薬品候補化合物の受託動向、さらに抗体-薬物複合体、核酸や再生医療等製品（細胞やウイルス）への当社の取り組みについても紹介しました。



Luncheon Seminar



営業部
養毛博文
Hirofumi Minomo

非臨床安全性試験における 臨床検査の留意点

安全性試験における評価項目の一つとして、ヒトと同様の臨床検査が実験動物を用いて行われます。これら検査結果は候補化合物の毒性プロファイルや得られた結果の臨床的意義についての総合的判断に用いられますが、動物種差や動物実験特有のアーティファクトの存在を考慮する必要があります。本発表では、上記内容を踏まえた安全性試験における臨床検査の留意点について当社の経験を踏まえて実践的な知見を発表しました。これまでの知見を整理し改めて体系的にまとめたことで、フロアからも活発な質問をいただき好評を得ることができました。



Poster Presentation



安全性研究所安全性評価部
第二毒性評価室

水由健介

Kensuke Mizuyoshi

個体識別用マイクロチップ (MC) をマウス毒性試験へ導入するための基礎データ収集

従来、個体識別として耳パンチ法や油性インク記載法が広く用いられていますが、耳パンチ法は侵襲性が高く、油性インク記載法は再識別が必要です。このため、侵襲性が低く、簡便で判読性の高い方法として、MC個体識別法が挙げられますが、日本での毒性試験への導入実績は多くありません。我々は、マウスにMCを13週間埋植し、その継続的な判読性と埋植が及ぼす影響について検討し、問題がないことを報告しました。学会はWebと現地参加でのhybrid開催でしたが、たくさんの質疑応答ができ、導入に向けての大きなマイルストーンとなりました。



Poster Presentation



バイオアナリシス研究室

福田剛司

Takeshi Fukuda

カニクイザルにおける抗AAV抗体の測定と陽性率に関する検討

アデノ随伴ウイルス (adeno-associated virus, AAV) は病原性を持たないことから、遺伝子導入用ベクターとして遺伝子治療への応用が期待されており、近年開発が急増しています。ヒト及び非ヒト霊長類はAAVに対する中和抗体を保有している場合があり、その存在がAAVの有効性や安全性の評価に影響を及ぼすことが懸念されています。我々は、カニクイザルにおいて抗AAV中和抗体の分析法を構築し、血清型AAV2、AAV5、AAV8及びAAV9に対する中和抗体の陽性率を調べ、薬効試験や毒性試験に供する動物をスクリーニングすることの有用性を報告しました。



Poster Presentation



薬物代謝分析センター
第二研究室

中西康晴

Yasuharu Nakanishi

Phenotyping of cytochrome P450 3A enzymes in individual cynomolgus monkeys by endogenous compounds in plasma determined by liquid chromatography-mass spectrometry

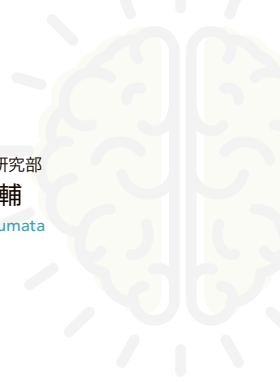
サルにおいて、6β-ヒドロキシコルチゾール (6β-OH-COR) および4β-ヒドロキシコレステロール (4β-OH-CHO) は、主に内因性物質であるコルチゾール (COR) およびコレステロール (CHO) からCYP3A触媒反応によってそれぞれ形成されることが報告されており、6β-OH-CORとCORの比率および4β-OH-CHOとCHOの比率は、in vivoにおけるCYP3A活性を反映している可能性が示唆されています。これらのバイオマーカーの濃度を測定することにより、ミダゾラムなどのプローブ薬を投与せずに、CYP3A酵素の表現型情報を取得し、試験に適した個々のサルを選択できる可能性があると考えました。そこでサル血漿を使用して個々のサルCYP3A表現型に関する情報を取得するために、血漿中の4β-OH-CHO、CHO、6β-OH-CORおよびCOR濃度をLC-MS/MSを用いて測定する方法を開発しました。また、確立した分析法をもちいて個々のサル血漿中のこれらのバイオマーカーを測定し、内因性化合物間の関係性を評価しました。その結果、サル血漿中6β-OH-COR/CORと4β-OH-CHO/CHOLレベルの間に相関関係がみられたことから、これらのバイオマーカーの血漿濃度比が、個々のサルのCYP3A表現型に関する情報を管理する有用な方法であることを報告しました。

The 48th Annual Meeting of The Japanese Society of Toxicology

サルを用いた中枢神経系薬効評価の ご紹介

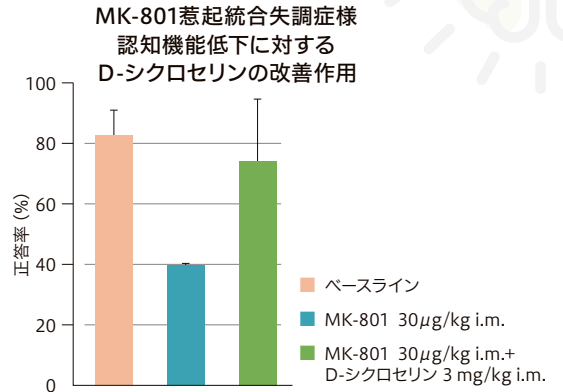
当社ではカンクイザルを用いた中枢神経系の研究開発に力を入れております。解剖学的・機能的にヒトに近い脳を持ったサルのデータは、サイエンスとしての意義が高く、中枢神経系薬効評価における臨床外挿性の向上が期待できます。今回はその一部として、認知機能評価、疼痛行動評価及び脳マイクロダイアリスिसについてご紹介します。

薬効薬理研究部
沼田洋輔
Yosuke Numata



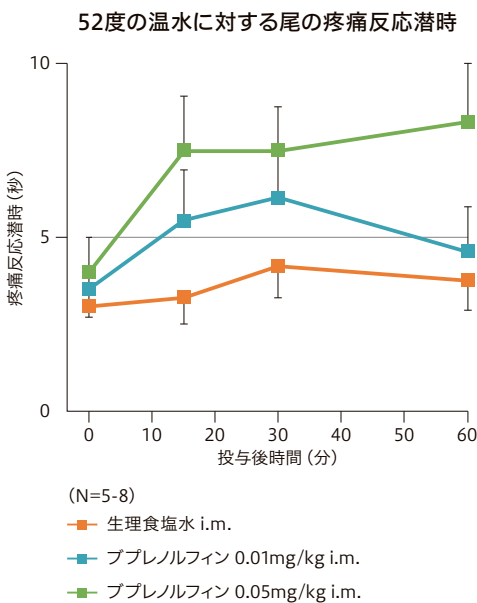
認知機能評価 (CANTAB®)

ヒトの神経心理テストでも使用されるタッチスクリーン式認知機能測定機器 (CANTAB®) を用いて、学習、記憶、注意などの認知機能評価を行っています。統合失調症様認知機能低下作用を示す薬剤惹起 (MK-801 など) モデルだけでなく、加齢性及び脳血管障害性モデルにおける認知機能評価に向けた研究を進めています。



疼痛行動評価

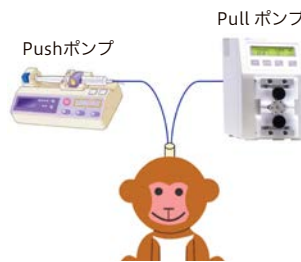
これまでサルの疼痛行動評価のほとんどは、動物の不安や精神的ストレスが高いモンキーチェアを用いた四肢固定下で行われてきました。そこで、我々は、サルの四肢が自由な状態で疼痛行動を測定する保定法を開発し、生理的な痛み (侵害受容性疼痛) に対する薬剤評価を行っています。現在、神経障害性疼痛を含む慢性痛評価系構築を進めています。



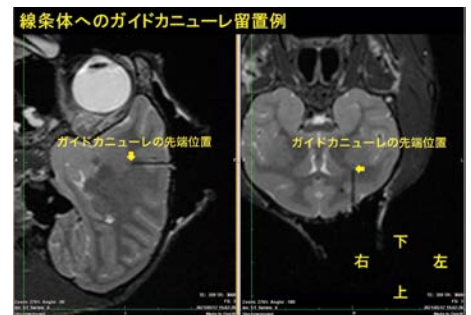
脳マイクロダイアリスिस

マイクロダイアリスिसは、神経伝達物質の測定以外にも脳への被験物質移行性の検討に有用であり汎用性の高い技術です。MRIを用いた個々の動物の脳座標決定と留置位置確認による正確なガイドカニューレ留置が可能です。また、動物は8時間以上の長時間の覚醒下実験においても、おもちゃで遊ぶなどリラックスした状態での実験が可能であり、薬剤に対する神経伝達物質の反応性を観察するために適した実験条件を構築しております。

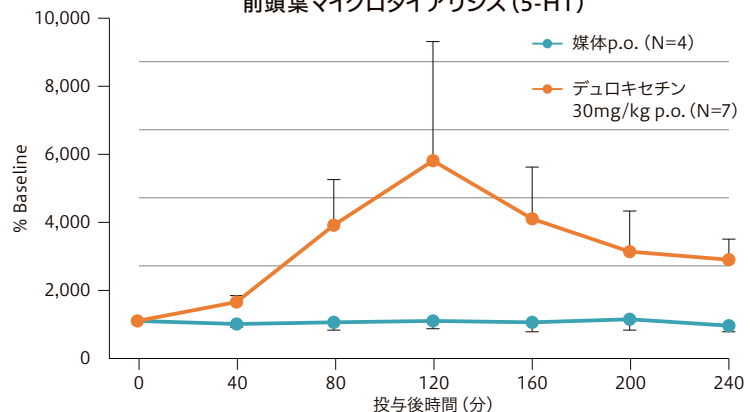
サル脳マイクロダイアリスिस



MRIを用いた目的座標設定及び投与・留置位置等の確認が可能



前頭葉マイクロダイアリスिस (5-HT)



コロナ禍でのGLP調査

薬物代謝分析センターは、1998年及び2002年に安全性研究所の一施設としてGLP適合性調査で「A」評価を受け、2002年の調査後は安全性研究所から独立したGLP施設としてGLP適合性調査を受けており、これまでに「適合」を継続しております（2014年以前は、「A」評価）。直近では、2020年8月にPMDAによる調査を受けており、逸脱事項の発出なしで「適合」の評価をいただきました。今回はコロナ禍での調査であり、多くの点で、これまでの調査とは異なるものでした。

今回のGLP適合性調査は、もともと2020年6月初旬の調査を希望して、2019年12月下旬に正式な申し込みを行いました。その後、2020年1月初旬にPMDAより、2020年5月下旬での調査日程でご連絡をいただき、例年通りの日程として、4月中旬に主計画表や調査資料等を提出するための準備をいたしました。その後、緊急事態宣言発令下の4月中旬、予定通りに提出資料を送りましたが、5月中旬、調査予定日に緊急事態宣言が発令されていることが確定し、実施調査の延期が正式に決まりました。緊急事態宣言が解除された後の6月中旬、PMDAから調査を担当される先生の変更、8月3日の週に調査を行う旨をご連絡いただきました。調査資料等につきましても、日程が延期された期間に対応する資料の準備を改めて進めることとなりました。このように調査日程の調整段階から日程が不確定なまま、調査の準備を進めていくこととなりました。

実際の調査は、8月3日から開始され、調査初日はリモートによる調査資料の確認となりました。調査2日目以降は実地調査となり、2日目はラボツアーが実施されましたが、施設側の対応者は3名までとこれまでの調査に比べて対応者が制限されました。また、同日にスタディオードットも実施されましたが、すべて完全な自己調査方式で実施され、その準備に時間を要することとなりました。3日目は自己調査方式でのスタディオードットと対面方式でコンピュータシステムの調査が実施されました。可能な限りPMDA調査官の滞在時間を短縮するという意図で、これまで行われていた運営管理者および信頼性保証部門責

任者のクローズドヒアリング、全体への講評は実施されず、また、様々な調査時の疑問点等も、その場での説明の時間を確保することが出来ませんでした。疑問点等の説明は、後日、文書による交信で解決していくこととなりましたが、無事にすべての疑問点等を解決することができました。

コロナ禍でのGLP適合性調査は、これまでの調査とは異なる点も多く、色々戸惑うこともありましたが、逸脱事項の発出なく、無事に「適合」の評価をいただくことができました。

薬物代謝分析センター
センター長
中村貴敏
Takatoshi Nakamura



GLP
Good
Laboratory
Practice

サステナビリティレポートの作成

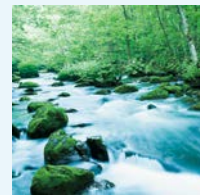
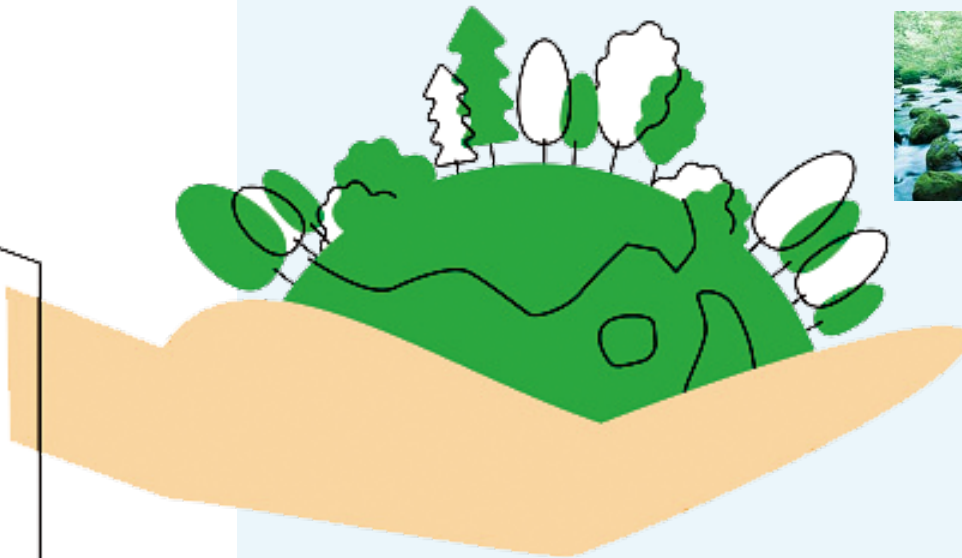
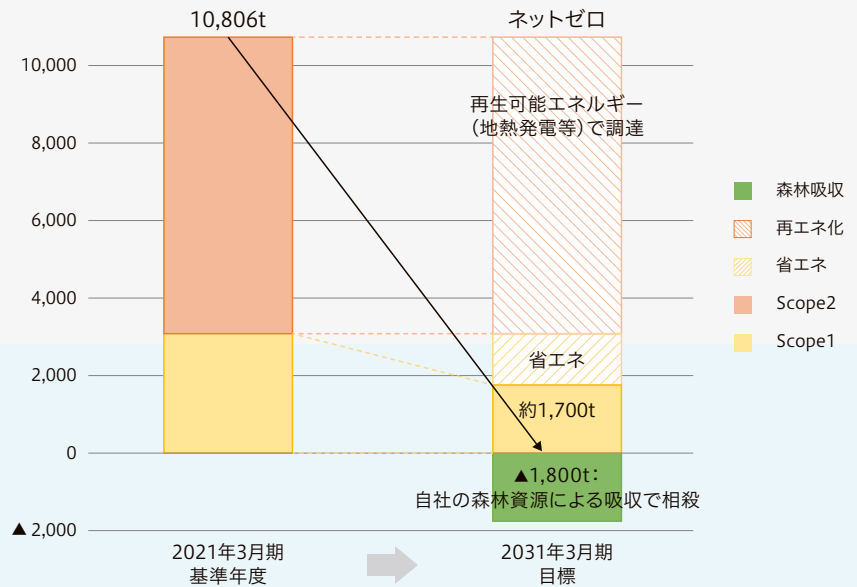


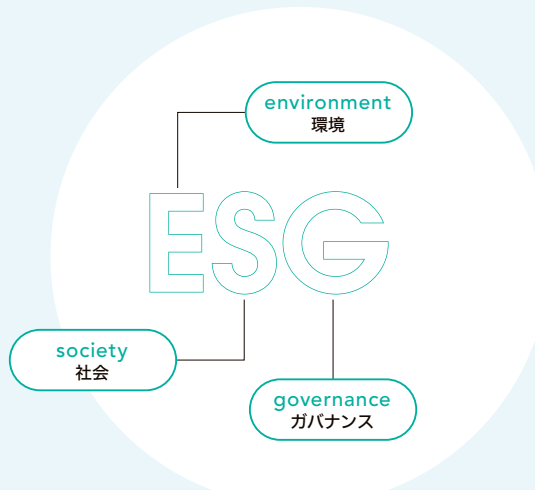
SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

2030年に向けて
世界が合意した
「持続可能な開発目標」です

- 1 No Poverty
- 2 Zero Hunger
- 3 Good Health and Well-Being
- 4 Quality Education
- 5 Gender Equality
- 6 Clean Water and Sanitation
- 7 Affordable and Clean Energy
- 8 Decent Work and Economic Growth
- 9 Industry, Innovation and Infrastructure
- 10 Reduced Inequalities
- 11 Sustainable Cities and Communities
- 12 Responsible Consumption and Production
- 13 Climate Action
- 14 Life Below Water
- 15 Life on Land
- 16 Peace, Justice and Strong Institutions
- 17 Partnership

温室効果ガス排出量削減目標
2030年カーボンニュートラルの実現





2015年9月の国連総会で採択された「持続可能な開発目標 (Sustainable Development Goals : SDGs) は、2030年までの達成を目指す世界中の人々が幸せに暮らせるように定められた世界共通の目標です。これは、創業以来の当社理念「環境・生命・人材を大切にできる会社であり続ける」と、当社スローガン「わたしも幸せ、あなたも幸せ、みんな幸せ」そのものであり、当社はSDGs/ESGの取り組みについて業界のリーダーであると自覚して取り組んでおります。

当社は2021年8月に取締役会の諮問機関として「SDGs委員会」を設置し、毎月活発な議論を行っています。その成果としてE (環境)、S (社会)、G (ガバナンス) に関する主要8項目に対する当社の基本方針と重点取り組みをまとめた「サステナビリティレポート」を10月29日付で作成し、自社ウェブサイト上の専用ページ (<https://www.snbl.co.jp/esg/>) に開示しております。

同レポートで注目していただきたいのは、環境に関する取り組みです。創業以来の当社理念を先ほど紹介しましたが、理念の最初に「環境」を掲げていることは特筆すべきことだと思います。環境に関して重点的に取り組むマテリアリティとして「CO2排出量の削減」と「生物多様性の保全」の2つをあげております。「生物多様性の保全」については、当社は鹿児島県指宿市に約103万坪の自然豊かな敷地(メディポリス指宿)を所有しており、この自然資本(9割が森林)を活用して環境に配慮した事業を行っています。今後、企業の気候変動に対する対応と並んで、生物多様性保全に対する対応にも世界的に関心の高まりが予想されますが、

当社はこの分野でも先進的な取り組みをしています。

IR広報統括部
岩田俊幸 Toshiyuki Iwata



The screenshot shows a website interface for ESG. At the top, it lists 'ENVIRONMENT', 'SOCIAL', 'GOVERNANCE', and 'ESG'. Below this is a main heading: 'Environment (環境)・Social (社会)・Governance (ガバナンス) への取り組み'. There are several menu items and a QR code at the bottom left of the screenshot.



メディポリス指宿

Sustainability Report



SHIN NIPPON BIOMEDICAL LABORATORIES, LTD.

株式会社新日本科学

<https://www.snbl.co.jp/> E-mail: info@snbl.co.jp



東京本社

〒104-0044 東京都中央区明石町8-1 聖路加タワー 28階
TEL.03-5565-5001 FAX.03-5565-6160

本店／安全性研究所

〒891-1394 鹿児島県鹿児島市宮之浦町2438
TEL.099-294-2600 FAX.099-294-3619

薬物代謝分析センター

〒642-0017 和歌山県海南市南赤坂16-1 海南インテリジェントパーク内
TEL.073-483-8881 FAX.073-483-7377

大阪支社

〒541-0044 大阪市中央区伏見町2-1-1 三井住友銀行高麗橋ビル
TEL.06-6233-8432 FAX.06-6233-8433